

エッセイ

“大学において学ぶこと”を考える
フィールド型ソーシャル科目の試み

生 江 明
日本福祉大学 経済学部

Thinking about 'Learning in University' from the Challenge
of Problem-Based Learning

Akira NAMAIE
Faculty of Economics, Nihon Fukushi University

Keywords : PBL, 正解探し, 適解探し, 教育の消費社会化, 「目黒巻」

私は子どもから学んで、授業に浅い授業と深い授業があると考えるようになった。成績の優劣が際立つものが浅い授業、その消えるものが深い授業だと、私は勝手にきめこんでいる。私は授業を、子どもたちからその可能性を引き出す仕事だと考えている。子どもは誰でも、自分も知らず人にも知られずにしまいこんでいるたからを持っている。子どもの中には、その能力をすぐ目につくような形で持っているものもあるが、ひどく見つけにくいふかいところにしまい込んでいるものもある。子どもはそれぞれに個性をもっている。それはあたかも種々の楽器が、それぞれに異なる音色を持っているのに似ている。だが、個性があるというのは、単にその音色が異なるだけのことではない。ある楽器はどんな演奏によっても容易に音を出す、あるものは、いい加減の鳴らし方では決して鳴らないのである。すべてそれぞれに固有のたからを持っている。それをいろいろな手段方法に訴えて掘り出す作業の中核が授業で、教師は、この仕事にたいして責任を負っているのである。それは、何かき

められた一定のことを教えて、テストをして、それを評価して終わる如き仕事ではない。それは子どもの持っている無限の可能性を引き出す仕事だからこそ、高度に専門的な仕事なのである。この仕事にたいして、教師は、きわめて、不十分にしか準備されていない。そして、子どもがふかいところにしまいこんでいる力をひきだすだけの授業をしないで、子どもの力を云々する。子どもの可能性が無限だというのは、このようにして、その力を限るのは許されないことをいうのである。

林 竹二『教えるということ』(国土社, 1990) 18頁
(1906-1985, 元宮城教育大学学長, 哲学者)

学生たちにとって、この世界が歴史の中で蓄積してきた、ベースとなる基本的な知識(過去から現在までに蓄積されたもの)を手にするの先に、現在でも解き得ていない課題、あるいは、現在の新たな状況の中で新たに浮かび上がった課題や問題を取り扱うことに、大学での学びがあるとすると、私たち大学の教員はこれにど

のように向かうべきなのであろうか。この論考は、現在の学生たちを考えることから始まり、多様な人びとが集う大学という場の中でこそ果たしていける教育の可能性を考察する。これはその試行錯誤に関する essay である。

「素直な学生たち」は社会から何を学んできたのか？

近年、入学してくる学生たちはとても素直である。これは、本学以外に非常勤で持っている早稲田大学政治経済学部、同文化構想学部においても同様である。入学試験の難易度で言えば、72前後という偏差値の高い壁を越えてきた学生たちにおいても、この良く言えば「素直」という特徴は変わらないように見える。それは「与えられるものは食うぞ!」というものである。しかし、教師が講義で展開するものを「知識」情報として受け取ってはいるが、それはたかだか情報としての知識であって、自分の観点から吟味することなく自分の知識の整理小箱にまるごと収めるだけであり、取り立てて疑問は抱かない。それは、疑問を抱くより、覚えておいて必要な時に引き出すなら良い成績が稼げるといふ、よく言えば極めてクールであり、講義はたかだか知識配給以上のなものも意味しないと学生たち自身が捉えているように見える。

「静かに座して師の教えを聞け」というのが小学校以来大学に至るまでの習いであり、隣に座る学友たちと議論することなく、空白のページを埋めていくことがその学習のすべてであるかもしれない。全国、全世界を巻き込んだ大学紛争や高校の学園紛争が静寂化した1970年半ばから、日本の学校では生徒や学生たちへの管理統制が進んだが、その中で、学級での子どもたちの討論の時間は姿を消してきた。それ以前は児童や生徒のクラス討論を含め「学活」と呼ばれた学級活動の時間は、教員や学校からの伝達の時間になり、「自主、自由、自立」などという児童や生徒の目指す指針は、一部の進学校と言われる旧ナンバースクールなどを除いて、その実態を失っていったという（戦前の各道府県にあった中学校が戦後、新制高校に姿を変え、愛知県で言えば旧制一中は旭ヶ丘高校、二中が岡崎高校、三中が津島高校、五中が瑞陵高校、七中が半田高校であり、これら設立順を校名とするか、必ずしも番号を持たないが旧制中学の流れをくむ明和高校など戦前からの古い名門校のことである）。そし

て今や、あの賑々しい学活の只中を経験した世代（現在の60歳前後より上）は一気に定年を迎え、そのほとんどが大学から姿を消すことになる。つまり、異なる意見を検討しあう議論の経験と場を持たない世代に覆われる可能性がある。それは大学という世界が、教職員から学生まで粛々と学習はするが、互いに議論することのない個人化社会に近くなる危険性を孕むことを意味するだろう。

私は15年前に本学に着任したが、一年目に、社会福祉学部の政治学を担当し、そこで自然法概念のいくつかの説を解説して講義を終えたところ、ひとりの学生がやってきて、こう問うた。「自然法に、いろいろな説があるの分かりましたが、そのどれが正解なのですか、それを教えてください!」。その後ろで、何人もの学生たちが「そうそう!」と頷いているのに気が付いた。私は正解が一つだけあるという大学受験対策の授業と同じものを期待している学生に、現世代までの到達点を越えていくことを課題とする授業をどのように行っていくかが課題であることを知った。あれから15年がたったが、こうした事態を抱える私の戸惑いはより深刻になっている。ここでその例として、本学3年生の今年度前期の講義から学生たちの様子を紹介しよう。講義の中で、スウェーデンで行われた「子ども手当」を親の収入によらず全員に給付すべきか、それとも親の収入により制限を設けるべきかという選択を問う国民投票について、その結果を学生たちに尋ねたことがある。現世代から次の世代へのメッセージとしてこの「子ども手当」を位置づけ、それ故に、たとえ有名な自動車会社の社長の子どもたちにも、生活に困窮している子どもたちにも区別なく、等しく給付すべしという「メッセージ説」と、あるレベル以下にある困窮世帯の子どもたちを選択して、給付を集中すべしという「選択集中説」のどちらをスウェーデン社会は選択したと思うかという問いである。学生たちの「スウェーデン社会観」を見ようとした問いである。そして、同じテーマで国民投票を日本で行ったとき、日本社会はどちらを選ぶと考えるかという学生たちの「日本社会観」を問うことで、学生たちの社会に対する認識の比較を浮かび上がらせようとした。最後に、「あなたはどちらを選ぶか」という学生たち自身の選択という三つを問うた。

この結果が興味深いものであった。第一のスウェーデン社会の選択を聞いたところ、140名の受講生中、1名がメッセージ説、12名が選択集中説を選び、残りの127

名は無回答であった。そして、第二の日本社会の選択では、メッセージ説はゼロ、選択集中説は20名、残り120名は無回答。第三の学生自身の考えは、メッセージ説4名、選択集中説30名、残り106名は無回答であった。この問い掛けは、結果的には期待の成果を得られなかった。ほとんどの学生が、問いに答えなかったからである。

なぜ無回答であったかについて、学生たち自身の授業感想文に書いた答えを紹介しよう。最も多かったのは、周りを見たら手を挙げている人が少なかったので挙げなかったというもの。次に多かったのは、間違ったら恥ずかしいというもの。さらに、より積極的に手を挙げなかった理由として、正解をまだ習っていないので、どちらが正しいかを答えることはできない、というものがほぼ同数であった。さらには、数人からは、教師が正解を教え、それを覚えるのが自分たち学生のやるべきことなのに、教えないで答えられるはずがないではないか、と私の問い掛けそのものの不当性を激しく指弾するものまであった。ここには、私の問いが学生たちは正解を知っているかでなく、スウェーデン社会や日本社会というものにどのような理解を示しているか、そして、自分自身の考え方をどのような価値基準に合わせて作っているのかを尋ねていたのだが、学生たちは「正解」に固執していることが鮮明になった。3年次生ということを考えるなら、小学校以来の正解を覚えなさい、書きなさいという教育がいまだに継続していることを窺わせる結果である。問題を多角的に捉え、自らの選択を明示的に語ることは極めて不得手であることが窺えるのである。

他方で、覚えることを放棄していない学生たちと、それすらも放棄していると思われる学生もいる。共通しているのは、考えることと選択することを放棄していると思われる学生たちの広がりがあるという懸念である。それは、林竹二がその著書『教えるということ』(国土社、1990)の中で語っている「子どもはみな勉強したがっている」という認識を裏切る状況を意味するものである。同書で林は、教師が学生を管理すること(黙して聞け)に集中し、本質を突く授業をしていないからだと指摘している。その言葉に私は襟を正す思いを抱く。教育とは教えることと育てることであると言う林が、学長在任中に行った小中高そして大学院の授業は、対象者の年齢の差を越えて素晴らしいものとしてあったが、それは授業の素材を説明するのではなく、素材を素材として歴史を語り、人間を語るものであるが故に子どもからおとな

(院生)まで、その授業に引き込まれていったに違いないと、林が行った授業記録を読むたびに思う。その記録は『教育の再生をもとめて 湊川でおこったこと』あるいは湊川高校定時制、尼崎工業定時制、南葛飾高校定時制の授業記録写真集『学ぶこと変わること 写真集・教育』(筑摩書房)で見ることができるが、それらは教育者・斉藤喜博(1911-81)の影響を受けた林の実践の記録である。

ある年に、教室試験の代わりにレポート提出を課したところ、ホームページにある私の論文をカット・アンド・ペーストしたレポートを提出した学生がいた。その理由を問うたところ、その答えは唾然とするものだった。「先生の論文は正解なはずだから、それを使いました。与えられた課題に答えるものでなくとも、先生が考える「正解」を提出したはずで、不合格はあり得ないはずです！」という主張であった。それ以来、私は試験問題にも、レポート課題にも「あなたの論を展開しなさい。結論だけの叙述は評価しない。」と注意書きを書くようになった。学生たちの中に、正解探し症候群ともいえるべき、「正解」を探すことが学ぶことだという認識があるように考えられる。しかも、「正解」は教師から与えられるものであり、自分で考えだすものではないという認識である。そして、この理解は大学受験や資格試験においてある程度当たっている。それらは合格後のスタートを切るための、最低限の基礎知識を問うものであるからである。そして、林に言わせれば、私の授業もその程度であったということになるだろう。

変わるべきは、私たち自身

私には、学生たちは社会というものに以下のような理解を示しているものと映る。すなわち、「社会は正解を覚えていることを求めている」。であるとするなら、つまらない社会である。既存の社会が生み出した規範やルールの淵源を深く追究するのではなく、ただ「正解」(とされているもの)を覚え、それに従うことが社会の求めるすべてであるならば、いまだに経験したことのない新たな困難に直面する状況には力とならない青年たちを送り出すことが大学の使命であると、学生たちも理解していることになる。そして、これらの青年たちを、そのように教育してきたのが私たち自身であるとするなら、学生たちの理解は、私たち自身の姿を表すものとも言える。変わるべきは、私たち自身である。

法律やルールの建前に従い、その淵源に理解を持つとしない青年たちに、私たち老いた人間は、建前によって均一化された老人像を演じながらお世話になるのである。教員としての危機感よりも、これらの未来の青年たちが今後作り出す社会が、マニュアルに従って生まれる社会となる恐怖を感じるのである。ソーシャル・ワークと深くかかわってきたこの大学が生み出し続けるのは、ソーシャル・ワーカーという呼び名のマニュアル・ワーカーが満ちる社会であるかのように恐怖するのは、私が老いてしまったからであろうか。いや、定年を間近に控えて、取り返しのつかない過ちに気が付いたということかもしれない。であるとすれば、自業自得である（『東日本大震災に学ぶ……想定外思考の構造とマニュアル文化の陥穽』、日本福祉大学研究紀要『現代と文化』126号参照）。

『象徴の貧困』（ベルナル・スティグレール）の意味するもの

ジャック・デリダ（1930-2004）の下で博士号を取ったフランスの哲学者ベルナル・スティグレール（1952-）は、その著書『象徴の貧困』（ガブリエル・メランベルジェ、メランベルジェ・眞紀訳、新評論刊、2006）の中で、ハイパーインダストリアル時代（超工業化社会をさらに超える時代）として現代を捉え、その中で人間は「個体化」よりも同質化することによる全体化へ追いやられていると警鐘を鳴らしている。彼が言う象徴とは、知的な生の成果（すなわち概念、思想、定理、知識など）と、感覚的な生の成果（つまり芸術、熟練、風俗など）の双方を指し、この象徴の力、意味を生み出す力が貧窮状態に陥っていると指摘している。彼が芸術という分野に託しているのは、政治的な思想を表現することであるが、そこで言う政治とは、それぞれに異なる利害や欲求を持ちながらも一つの社会（都市国家）を維持しつづけるフィリア（アリストテレスが言う友愛）のことである。異なるにもかかわらず共にその社会全体を維持することに同意することなくして、社会は存立せず、異なる他者の排除か、抑圧による同一化＝沈黙化することになる。

ジル・ドゥルーズ（1925-95）が「コントロール社会」と名付ける現代社会は、この同一化をもたらすテクノロジーな社会のコントロールを特徴とする。あるいは、ミシェル・フーコー（1926-84）が喝破する、生そのも

のをコントロールする生政治を特徴とする近代のよりテクノロジー的な実現であり、マニュアルはその道具であるだろう。

スティグレールは芸術の役割を、その個性的な、個別的な感性の表現において、同一化や均一化を拒みながら表現を止めぬことで、感性としての他者性を示し、そのことを通じて共同性を育むものであるが故に、政治的であるという。個的な体験を通じずに、コントロールにより生まれる同一性は、カオスを生み出すのではなく秩序を生み出し、人びとは個的であるよりは同一であることにおいて、他者との関係によって成り立つ自らの生の営みを退化・解体させられてしまう、と述べる。

また、消費社会とは、スティグレールによれば「物はあふれているのに心が満たされない」人びとのために、特別で限定の商品を提供することで心の空洞を満たす「欲望の規格化」の中に吸収されていく。そのような規格化された欲望を共にする人びとの模倣的で自閉的な集団が出来上がるが、それはもはや異なるものをつなぐものとはなりえず、また、より良い社会を形成するよりは、より良い商品を手早く購入することで閉じていくものとなっていることが、私たちの未来を閉塞させていくものとして捉えている。

この書が捉えている現代の姿は、私たちの大学教育の場においても該当するのではないかと私は考える。すなわち、学生たちだけでなく、私たち自身が自分たちの未来を、より良き社会への希望として描いておらず、日々のルーティンの果てに、私たちは自分たちの生きる場を批判的に捉え返すよりはむしろ、目標の達成率などの指標に、希望をすり替えさせられたまま疲れ果てているのではないだろうか。つまり、知らず知らずのうちに、考えることと選択することを放棄しているのではあるまいか。

焦りにも似た感情が広がる中で、その一つの突破口として私が考えるのは、以下に述べる、教員みずからが手探りで始める「正解」のないフィールド科目である。

「正解」のない、フィールド科目の試み

フィールド科目とは、教室を出て、現場の中で考えることを進める科目である。現場に出れば誰にでも同じものが見えるわけではない。それぞれが自分自身の中に持つ鏡に映るものしか見えない。批評や評価と同じく、その結果はその人の世界や力量を映し出すものとなる。多

様な人びとが集まればこそ、そして、老若男女の違い故に多様な立体像が見えてくる可能性が高まる。

今年度からスタートする経済学部と社会福祉学部のジョイント科目「地域研究プロジェクト」において、私は美浜町を舞台とする自然災害に対応する地域社会をテーマに両学部20名あまりのクラスを始めた。この中で、私が取り組もうとしていることは多岐にわたるが、その一つは、災害に遭遇するそれぞれの個別状況の中で、学生たちや住民がそれぞれの判断と共同性を発揮して、的確な対応を行える災害訓練を実施することである。

学生や住民がそれぞれの日常の中で、海に近い所、山に近い所など様々な場面で暮らしている。そこに南海トラフという激しい自然災害が発生し、被災の中で避難が開始されるだろう。倒壊する家屋やブロック塀などで避難路を塞がれ、車椅子などでの移動・避難が困難な場合の予想も出てくる。情報が途絶し、見捨てられるけが人も出てくるかもしれない。あるいは、救助の最中に津波の犠牲になる場合もあるだろう。そして、しばらくの間は救援チームが外部から入ることは期待できない。元気な避難者は、救援者となって津波によって浚われた地域を、生存者を探して歩き回ることになるだろう。

震度7という日本人が経験する最大の揺れの後に、この町の各所で家々やブロック塀などの倒壊、さらには火災の発生により避難路を塞がれた所に、約1時間以内に深さ4mから8m(上野間、奥田、野間などの地区によって異なる)の津波が毎秒10mの速度で押し寄せることが想定されている(内閣府防災予想2012.8.29発表)。海岸から知多奥田駅までその深さと勢いは衰えることはない。

この地震発生が季節の違い、発生時刻の違いによって、被災地となるこの地域にどのような災害状況の違いを生むのかを、特に、学生や観光客などと元々の住民の状況を踏まえた避難状況を考えると、大きな幅を持った違いが浮かんでくる。深夜であるならば、ビーチランドなど海岸沿いに観光客はいないが、地震発生と同時に想定される地域全体の停電で、漆黒の間の中でひとびとは倒壊した家屋や塞がれた道の瓦礫を越えて避難することを強いられる。障碍学生たちは逃げ切れるのだろうか。傷を負って身動きの取れなくなった学生たちは、津波到達まで50分ほどの余裕しかない中で、どのように救出され得るのだろうか。……いくつかの状況想定の下に、フィールド歩きを終えた学生たちが危険情報の洗い出し作業を

行っている。やがて地域の人びとと行う危険情報の収集の先に、リアリティに満ちた防災計画や避難訓練の計画案が地区ごとに生まれてくるだろう。

現在進行中のこのワークショップでは、東京大学生産研究所の目黒教授の発案する通称『目黒巻』というイメージ想像型の多様なシミュレーション・モデルと群馬大学大学院の片田敏孝氏の津波避難三原則を使いながら、この発災から復旧までの期間に、どのような事態が生まれ、そして人びとのどのような対応が人びと自身を救っていくのかを、多角的に学生たちと、地図上また現場においてシミュレーション・ワークショップを繰り返している。そして、今後は、要注意危険箇所や危険状況の洗い出しを地域住民との協働で進めていこうと考えている。

特に期待するのは、地域の小学生や中学生の子どもたちの行うワークショップで見出される危険箇所や危険状況に、地域のおとなたちや本学の学生たちがどのような解決策を以って応えるか、という点である。地域の子どもの不安や心配に大人たちが応えるのが、地域の防災・減災計画となる時、私たちは地域社会の「弱点ゆえの関係の再編」という金子郁容(1948-)が示す『コミュニティソリューション』(1999 岩波書店刊)を手にする人びととなるだろう。

この互いを必要としあうという意味でのソーシャルな場の経験が、学生たちの今後の人生のソーシャルな展開の発端になることをこの企画は期待している。繰り返される対話と議論と、様々な人びととの協力なしには進まない、この試みの向こうに、多角的に考え、多声性のある情報と発信を繰り返しながら社会を生み出していく経験が学生の中に生まれ、これまでの教育の場に加える新たなページが生まれることを期待している。残りまで後1年余である。

* その成果は、参加学生の報告書として、2013年春、夏、冬の三回に分けてまとめられる予定であるが、別途この紀要にも報告することを予定し、またその成果の一部を2013年度秋季全学オンデマンド科目として現在準備中の防災教育科目に活用する予定である。